



TITLE:

<批評・紹介>木村正雄著「中國古代農民叛亂の研究」

AUTHOR(S):

東, 晋次

---

CITATION:

東, 晋次. <批評・紹介>木村正雄著「中國古代農民叛亂の研究」. 東洋史研究 1979, 38(3): 464-469

ISSUE DATE:

1979-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153748>

RIGHT:

## 批評・紹介

### 中國古代農民叛亂の研究

木村正雄著

昭和五十四年二月 東京 東京  
大學出版會 A5判 四八七頁

本書は、大著『中國古代帝國の形成——特にその成立の基礎條件——』（一九六五年）によって中國古代史研究に大いなる貢獻をされた故木村正雄氏が、六〇年代後半から七〇年代初めにかけて發表した一連の古代農民叛亂に關する論稿をまとめて成ったものである。本書の成立經過については、田中正美、鶴見尚弘、多田狷介三氏の連名による「編輯後記」に、著者に對する敬慕の念と共に記されている。本書の構成も編者苦心の存する所で、農民叛亂に關する論稿を第二篇として構成するとともに、その理解に資するという目的で、古代史に關する著者独自の理論的見解を盛った論稿を第一篇として配している。以下、まず本書の構成と内容の概略を示すために章目を列舉し、順次紹介と若干の感想を述べることにする。

#### 第一篇

##### 第一章 中國古代專制主義の基礎條件

第二章 漢代における第二次農地の形成と崩壞——特に關東を中心として——

#### 第二篇

第一章 秦末の諸叛亂——特に陳勝集團の性格と機能をめぐって

第二章 前後漢交替期の農民叛亂——その展開過程——

第三章 兩漢交替期の豪族叛亂——隗囂集團と公孫述集團——

第四章 劉永集團の形成と展開

第五章 黃巾の叛亂

このあと、「本書によせて」（西嶋定生）、「木村正雄先生略年譜」、「木村正雄先生著作目録」、「編輯後記」と續き、索引並びに前後漢郡國圖の折込地圖二葉を附す。

第一篇第一章は、前著『中國古代帝國の形成』の第一章「總論」と「中國古代專制主義の基礎條件」（『歴史學研究』二二九號、一九五九年）より成り、後者のタイトルは章名として、内容は補論として採られている。第二章は、『史學研究』二六號（一九六〇年）に發表された論稿を同名のまま收録したものである。この第一篇は前述の如く本書の「導論」として設けられたもので、すでに前者の中で詳しく展開された著者の古代史に關する基礎理論の要約ともいふべきものである。前著についてはすでに影山剛（『歴史學研究』三一三號）、尾形勇（『史學雜誌』七五—四）兩氏が紹介の勞をとられている。ここでは本論第二篇の理解に必要な限りでの要約を行うにとどめたい。

第一篇第一章において著者は、中國古代の基本的生産關係を「齊民制」という奴隸制の特殊な型態——古代における最も基本的な勞働力としての一般農民＝齊民に對し、國家は一種の私有地たる標準百畝の民田の私有を認めたが、それは言葉の全き意味での私有地で

はなく、用益税ともいうべき田租の徴収によっても知られるように、國家によって分與された性格のもので、民田所有者たる一般農民は本籍主義による人口の把握、人頭的税役制度によって國家に隸屬し、獨自な生産體を形成することができない體制——として捉える。かかる生産關係が形成されたのは、乾燥と洪水という華北の自然條件によつてである。春秋時代までは自然に洪水が避けられ、自然に灌溉可能な部分だけが農地となり得た。著者はこれを第一次農地と呼ぶが、それは自然條件の變化、治水水利技術の進歩がない限り擴大の見込みがなかった。ところが春秋中期以降、鐵器の普及、土木技術の進歩によつて大規模かつ人爲的な治水水利機構が作られ、それによつて第一次農地の外延に或いはまったく新しい地域に農地が形成され始めた。これが第二次農地（第二篇では典型的な第二次農地を河北平野、淮河流域平野、渭水盆地、南陽郡の一部とする）である。中央集權的帝國的統一はまさにこの第二次農地の形成によつて可能となった。そこには新縣が設置され、大規模な徙民、計口授田が古代帝國權力によつて實施された。これらの治水水利機構は國家權力によつて支配・掌握されたから、農民は國家に依存することになり、逆に國家は農民を支配し得たのである。従つて古代史は、王朝末期の政治の頹廢、統一政權の崩壞によつてもたらされる治水水利機構の老衰、廢絶から第二次農地における農業生産力の低下ひいては饑饉の發生、人口激減によつて新縣は崩壞し、廣汎な農民叛亂が發生するということの繰り返しであつた、と著者は言う。

第二章は、關東第二次農地の形成と崩壞過程を前漢一代を通して述べたもので、その過程を三つに劃期する。一期は、高祖から景帝

末年に至る、秦末諸叛亂の結果荒廢した治水水利機構の復興、第二次農地の確保に努めた時期で、文帝期の石隄による治水、景帝期の第二次農地への民の移住の獎勵などによつて、景帝期には一度の河決もなく、治水水利機構が確保され人口も漸増した。二期は、武帝初めから宣帝末年に至る約八〇年間で、治水水利機構は河底の高まりによつて老衰化し、しばしば隄防の決壊をみたが、屯氏河の分流によつて元帝期までは洪水の害が少くなり、第二次農地もかううじて確保された。三期は、元帝初年から王莽末に至る期間で、元帝期の屯氏河杜絶、儒家の天譴説にもとづく「修政放置論」や財政窮迫などによる治河放置によつて關東の治水水利機構したがつて第二次農地は決定的に崩壞する。第二次農地の崩壞は農民を流亡化させ、農民叛亂の發生を必然化した、と結ぶ。

第二篇は目次で示した如く、秦末から後漢末までの農民・豪族叛亂それぞれの展開過程、集團の構造、性格、機能について検討した諸論稿を全五章に配したものである。

まず第一章は、秦末各地に蜂起した諸叛亂集團の成立と展開について、特に陳勝集團の性格と機能に焦點を當てながら詳細に論じたものである。ここでは、「陳勝集團は農民叛亂集團であつた」という「通説」を検討することを課題として掲げ、當初から陳勝集團に屬していたと著者が考える二二名の出身縣の新舊や社會經濟的地位の検討、「發間左・「黠戍」の考察、その構造的特質を明らかにするための他の叛亂集團との比較を踏まえて、陳勝集團が貧民の叛亂集團であつたとは言えないばかりか、まして少年・客・亡命など地域の生産集團から疎外された特殊な人々の集團であつたわけでもなく、「極めて普通な齊民、編戶の民、閭里を形成した父老子弟の集

「國で」あり、「この叛亂は全く普通の農民叛亂であつた」と判定している。又、秦末諸集團に共通する要素として、秦の專制支配を打倒し、當時の支配方式として他に考えられなかつた帝國的中央集權的專制主義支配を、自ら或いは適當な人物を立てるることによつて再生産するところに諸集團の目標が必然化されたことを挙げ、陳勝集團もその例外ではなく、兩漢交替期の豪族叛亂と同様な機能を果たし、所在寇掠した農民叛亂とは異なる性格を有するとの指摘を行っている。これは、秦末の時點では未だ第二次農地が廣汎に展開せず、齊民制が形成過程にある所にその理由を求める如くである。

次に、前後漢交替期における諸叛亂の考察が行なわれる。著者はこの時期の赤眉の亂に關する先行研究を批判しながら、兩漢交替期の諸叛亂の性格の相違によつてそれらを農民叛亂と豪族叛亂の二つに類別する必要があるという。そしてこの二つの叛亂集團の性格、構造、機能の相違は、二つの集團の基礎にある生産關係の相違、從つてその矛盾の激化の相違に由るとする。この時期の農民叛亂は漢末から王莽時代にかけての治水水利機構の荒廢によつて餓死か流亡かを餘儀なくされた第二次農地農民が、生産組織の恢復を願ひ、「強力で善良なデスポットの出現」即ち王莽政權を否定し、劉氏による漢體制の復興を希求する所にその共通題目を有した。他方、豪族叛亂は第一次農地の發達した山間河谷などに發生し、在地の生産集團を郡縣制的に支配しながら自立を圖ろうとした集團である。以上の兩漢交替期の諸叛亂に關する著者の把握の論證が、第二章で諸多の農民叛亂を、第三章で豪族叛亂（陳勝と公孫述）を、更に第四章では、二つの集團の關係を見るために劉氏の直系であつた劉永の集團を取り上げ、それぞれの展開過程を可能な限り克明に敘述し、

各集團の性格や機能を考察しながら展開されている。各叛亂についての敘述の要約は省略するが、この時期の諸叛亂の考察のうち、著者が至る所で指摘しているのは、二つの集團の性格の相違である。

農民叛亂集團の特徴は、地域の生産集團としてその地域を支配する政治集團ではなく、流動しながら寇掠することによつてその集團を維持する、第二次農地から流亡した農民による集團であるという性格をもつのに對し、豪族叛亂集團は時の政權に叛旗をひるがえし自立を志向した集團で、その基本構造は中央政權と異ならず、郡縣の生産集團を政治的に支配し、稅役收入によつて集團を維持する在地性のあるものである。このように理論的には截然と區別できるが、個別具體的には各々の叛亂集團は典型的なものから中間型のものまで様々な表われ方をするという。

最後の第五章では、まず黃巾叛亂は齊民制の矛盾を基礎條件として發生したもので、その點赤眉の叛亂とはとんどこわらない典型的古代的農民叛亂であることを結論的に述べる。そして黃巾叛亂を中平元年の張角の死を境にして前期と後期に分け、前期黃巾は張角を指導者とする整然と組織された太平道信仰集團の組織的主體的叛亂であつたのに對し、後期黃巾は必ずしも太平道信仰とは關係なく、第二次農地の恢復が成らないために續々と發生する流亡農民によつてひきおこされた、單に黃巾を稱したに過ぎないもので、他の一般の農民叛亂と異ならないとし、黑山白波の賊、南陽・三輔などの第二次農地から益州に流入した農民を包攝して形成された五斗米集團、その他の諸叛亂の展開過程を跡づけて、そのほとんどは第二次農地の崩壞に伴う流亡農民による農民叛亂集團であつたとする。さらに、諸叛亂集團の性格と機能についてふれ、太平道、五斗米道

の入信者達は、第二次農地の崩壊によって肉體的にも精神的にも窮迫した流亡農民によって構成されたことを論じ、又、太平道集團が五行相生説にもとづく革命の理論を、五斗米集團がユートピア建設の理念をそれぞれ有していたことから、他の時期の農民・豪族叛亂集團の目標と異なり、專制的郡縣制的支配體制そのものを變革しようとした點で中國史上注目すべきものとする。最後に、農民叛亂の處置について、曹操の屯田水利の政策にふれ、農民叛亂發生の惡循環（第二次農地の崩壊→流亡農民の發生→第一次農地への流入→第一次農地の人口増大・食糧不足→第一次・第二次農地農民の他地域への流亡）を斷ち切る根本的施策として意味づけている。

以上が本書の概要であるが、これまでの紹介で明らかになように、本書第二篇に收められた諸論稿は、著者の「中國古代社會に關する基礎理論を補強し、證明せんがため」に著されたものである。即ち專制國家と小農民が第二次農地を媒介にして齊民制という基本的階級關係を構成しているとすれば、齊民制の矛盾が農民叛亂にもっともよくあらわれる筈であるという豫測の上に立つて著者は、秦末から後漢末までの諸々の農民・豪族叛亂集團の成立、展開、構造、性格、機能の諸側面を可能な限りの史料を驅使して追究し、第二次農地論によってそれらを整理解釋して、種々の點で斬新な手法や見解を提示している。例えば、ある集團が農民叛亂集團であったか否かの判定は、指導者の出自のみによるのではなく、その集團の行動が所在寇掠的であるかどうかにも求められ、それがその集團發生地域の農地の性格によって根據つけられている。特に兩漢交替期における農民叛亂集團と豪族叛亂集團との類別の必要の指摘は貴重であり、その類別の手法に著者の第二次農地論が遺憾なく發揮されてい

て説得的である。更始政權の崩壊の理由を、南陽劉氏中心の豪族叛亂集團と連合した綠林集團が寇掠によって集團を維持する農民叛亂集團であつたため、その指導權を渠帥に握られることにより郡縣制的支配體制を確立できなかったことに求めたり、劉氏の直系たる劉永集團が中央政權を樹立できなかった主要な理由を、劉永が據つた梁國が第一次農地と第二次農地の交錯した地域に位置したため、第二次農地からの流亡農民によって第一次農地も害を被り相互に分斷されて一圓的な郡縣制的支配體制がとれなかった點に求めていることなどは、そうした手法による著者獨自の見解である。赤眉集團の更始政權への降伏、一轉して更始政權打倒の一見不可解な行動も、第二次農地の恢復という點から説明されるとその限りで甚だ納得がいく。又、秦末、兩漢交替期、後漢末の各時期の農民叛亂集團として共通性をもつ陳勝、赤眉、黃巾の各集團の異なつた性格や機能が、前後漢を通じて展開した第二次農地とその上に構成された齊民制の成立、展開に照應させて捉えられている點にも、著者の基礎理論と農民叛亂を關係づけて捉えようとする姿勢が明確に打ち出されていて、本書の目的はほぼ達成されているといつてよいだろう。

このように、本書は古代における諸叛亂の全體的構圖や性格などをきわめて明確に示してくれるものであるが、讀み進むにつれて疑問を感じる點もないではなかった。例えば、陳勝集團の分析に際し、陳勝配下の諸將二名が大澤鄉における九〇〇人中に含まれていたとする論證の仕方にやや強引なところがある點、隗囂集團の諸將の出身地の農地の性格からその政治的志向（光武政權に敵対したか否か）を導き出す方法が短絡的な感じがする點、又、豪族叛亂の基礎には第一次農地の生産關係の矛盾があるとするが、それがどのよ

うな矛盾で、叛亂とどう關わるのか、具體的な論證過程からも理解しかねたことなど、個々の點で他にもいくつか感じられたが、本書を通讀しながら感じた最も大きな疑問は、一體叛亂とは何に對する叛亂なのだろうか、というそれである。農民、豪族叛亂雙方に感じた疑問であるが、ここでは農民叛亂についてのみ述べることにする。

著者によれば、農民叛亂發生の主要因は王朝末期の政治の頽廢による第二次農地の崩壊、生産組織の破壊にある。別の表現では「農民叛亂の基礎には第二次農地の國家的生産關係」の「矛盾の激化」がある、とする。この「國家的生産關係」は他ならぬ齊民制の謂であるから、「齊民制の矛盾の激化」と言い換えてもよいだろう。すると第二次農地の崩壊が齊民制の矛盾の激化をひきおこし、叛亂を生じさせるという論理になる。ところで齊民制の基礎矛盾は他の個所では民田所有の不均等化にあるとされるが、第二次農地の崩壊と民田所有の不均等化がどうつながるのか判然としない。たしかに農民叛亂が第二次農地の崩壊によって生じたことは理解できるが、齊民制の矛盾と叛亂との關係がすっきりしないのである。この點すでに尾形勇氏によって指摘されているように、齊民制の基礎矛盾の捉え方に問題がある——つまりそれを力役・兵役・錢納税制という農民の負擔、重壓を生み出す支配關係そのものに求めることも可能である——ように思われるが、それはともかく、兩漢交替期の農民叛亂の叛亂對象との關連で言へば、叛亂農民は第二次農地の恢復を求めて行動を起こしたと説かれ、彼らの叛亂は、著者も言うように、齊民制を何ら否定しようとしないうちになつてしまつて叛亂對象が非常に不明確になつてしまふ。國家權力—王莽政權の打倒にそ

の叛亂が向けられたとされるが、しかし王莽が倒れ、更始政權が崩壊しても叛亂は終息しない。光武政權に對しても結果的には屈服するが敵對的であつた。赤眉の行動を見てみると確かに著者の理解に首肯せざるを得ない側面もあるが、後漢末黃巾の叛亂は、著者自身「既存の支配體制を破壊することからはじまつた」とするように、叛亂の對象が齊民制的支配そのものにあつたとも解することができるように思われる。兩漢交替期の叛亂にも後漢末と同様な叛亂農民の志向を見出すことができないだろうか。しかし著者は赤眉の叛亂について、「當時の生産力の段階で、第二次農地の開發維持が、中央集權的な專制權力を必須とする以上、たとえその叛亂が國家權力に向つていたとはいつても、專制體制そのものを根本から否定することはできなかった」とする。この指摘はしかしながら結果の説明であるように思われ、農民叛亂の目標が第二次農地の恢復にのみあつて齊民制支配の打倒とは無縁であることにほ釋然としないものが残る。又、農民叛亂と、漢代を通して成長する豪族による郷里支配がどうかかわるのかという問題も感じた疑問の一つである。本書では農民叛亂の要因を「大土地所有者の地主的擄取」に求めることについては否定的である。というのは、著者の考える典型的な古代農民とは、專制國家によつて百畝の田を分田され徙民された第二次農地の農民であり、大土地所有者といへども第二次農地では國家權力に依存している以上、大土地所有による擄取が叛亂の基礎條件にならないからである。しかし、第一次農地の（ということとは第二次農地でも）土豪の生産關係が完成していない兩漢交替期はまだしも、後漢末の諸叛亂が豪族支配の體制と全く關わりがなく、叛亂集團がそれを攻撃の對象としていないとは考えにくく、潁川、汝南

など豪族の簒生する地域に黄巾が生起したが、それらが流亡農民による叛亂であるとは本書で證明されていないことからすると、第二次農地における大土地所有の展開、小農民搾取の問題と合わせても少し考えてみなければならぬのではないか。

以上の何に對する叛亂であつたのかという疑問は、更に考えていくと、それぞれの叛亂集團が叛亂對象に向けて何を、つまりどのような社會、人間關係の在り方、それは世界と言ひ換えてもよいだろうが、對置したかという問題に連なっていくように思われる。この問題について云々するのは本書の紹介としては見當はずれになるかもしれないが、赤眉、黄巾、五斗米各集團に共通していると思われるのは、本書の敘述からもうかがえるが、共同性、平等性への希求が強く存する點である。叛亂集團に見られる共同性、平等性への希求は、叛亂農民が叛亂對象に對置した世界の一端を垣間見させていて、黄巾叛亂については川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」などいくつかの業績がすでにあるが、今後こうした觀點からの叛亂史研究も一層重視されねばならず、そのためには農民生活の實態や意識世界の検討がなされねばならないだろう。それと關連して、著者は赤眉、公孫述、黄巾それぞれの集團が自らの正統性や目標を承認させたり表現するために掲げた五行説にもとづく革命理論にふれていて興味深い。赤眉、黄巾の赤、黄が何を表現しているのか未だ定説の如きものはないが、著者の五行説による解釋は先學の見解を取り入れていて有力なものである。

要は、本書に明示された如き諸叛亂生起の自然的社會的諸條件と、それと關わりながら生き、歴史を展開させた人間達の營爲とによって織りなされた複雑な歴史的世界の様相を全一的に捉えなければならぬ

らないという、當然すぎるが困難な課題のより一層の追求が後に残されていると思われる。

秦末から後漢末に至る複雑な各集團の動向、展開を史料を博搜し、著者自身の理論によつて整理し意味づけた本書は、今後この分野の研究に缺くことのできない成果であらう。しかし、古代農民制の最後の段階たる隋唐期、そしてそれが地主佃戸制に轉換する唐末までに生起した諸叛亂の考察を、今や著者に期待できなくなったことを非常に残念に思う。末尾ながら、著者の御冥福を心から祈るとともに、かかる貴重な業績を一本に編纂して後學の研究の便に供された編者三氏の御苦勞に謝意を表して、この難駁なる紹介を終えたいと思う。

(東 晋次)

*The Cambridge History of China, Volume 10 :  
Late Ch'ing (1800—1911), part 1.*

Edited by John K. Fairbank,  
Cambridge University press,  
1978. xvi+713pp.

『ケンブリッジ中國史』は、完結すれば、ハーバード大學のJ・K・フェアバンク教授とケンブリッジ大學のトウィチエット教授の英米共同編集による全十五冊で構成されることになる。さて、この第十巻が最初に刊行された事は、決して驚くべきことではない。何故なら、歐米の學界は從來十九世紀史―西洋がアジアを「開國」さ